

建築・デザイン学部新設

大阪電気通信大



「面白い」追求 センス育てる

大阪電気通信大の寝屋川キャンパスに来年度、新たに建築・デザイン学部が開設される。建築や空間デザイン領域への展開は、大学入試の文系・理系という垣根を取り払って現場に必要とされる人材を創り出す挑戦でもある。学部長に就任予定の上善恒雄教授に新学部開設の狙いを聞いた。 【安部拓輝】

学部長に就任予定 上善恒雄氏



じょうぜん・つねお 大阪市出身。1962年生まれ。京都大大学院工学研究科数理工学専攻修了。大阪大大学院環境工学博士後期課程で博士(工学)を取得。阪急電鉄文化・技術研究所、千里国際情報事業財団で情報インフラの整備を手がけ、阪大院では建築環境のための情報技術を研究した。2004年、大阪電気通信大デジタルゲーム学科教授に就任。

欧米の建築学は文系と理

◆デジタルの技術革新は従来の大学教育の枠組みを飛び越えて進化しています。例えばホームページはプログラミングが得意なひと作れませんが、現在はテンプレートシステムを使えばプレザン資料を作るよりも簡単です。プログラミングの専門知識よりもむしろ、どんな言葉で誰に何を伝え、それを写真や動画やイラストでどう見せたいかというセンスが問われるようになりました。建築分野も同じで、もはや定規で図面を引いている人はいません。現在はデジタル空間に三次元モデルの建物設計すると同時に、建築素材による熱効率や耐用年数に基づいた維持管理コストの試算まで一つのシ

システムに情報を集積でき、一方、日本の産業界には分業の仕組みがあり、大学教育の体系も技術革新に追いつかない実態があります。今回の学部開設の際には建築とコンピュータの両方を教えられる人材を見つけるのにも非常に苦労しました。デジタル技術を扱える人材が乏しかった建築・土木の現場には特に実学が強く求められています。建築やデザインの仕事が変わってきているので、デジタル技術に強い人材が求められています。住まいのデザインも、家電製品を外出中でも操作できるなどスマートホーム化が進み、快適性とエネルギーの効率的利用の両立、建物を長期的に維持する技術も発展が予想されます。そこで従来の学問の常識に縛られない履修体系が必要なのです。◆入学試験は数学と理科、外国語の3科目型だけではなく、国語と英語の2科目でも受験できます。建築学を学ぶ上で必要な数学的な考えや物理の基礎は入学後に授業で丁寧に教えます。



昨年3月に完成した寝屋川キャンパスの新棟
—大阪電気通信大提供

キャンパス	
寝屋川キャンパス	〒572-8530 大阪府寝屋川市初町18-8
四條畷キャンパス	〒575-0063 大阪府四條畷市清滝1130-70
学生数	
5703人 (2023年5月現在)	
学部	
工学部、情報通信工学部、医療健康科学部、総合情報学部	
ホームページ	
https://www.osakac.ac.jp/	

デジタル技術と実学 多角的に学ぶ場に

系の垣根はなく、日本だけが工学分野とされています。スマホは電気電子工学を代表する機器ですが、数学が分からなくても使えますよね。高校や大学で勉強するような手計算で処理できる課題は建築の現場にはありません。複雑な計算はコンピュータに数値を打ち込めば答えを出してくれまます。生まれ育った環境や趣味の世界で培った発想を生かす方が何百倍も重要です。「私は文系だから」と諦めるのではなく、面白いなと思うことを共感できる人と一緒に学んでいくことで、あなたのセンスは花を開きます。いろいろな舞台があるのが建築やデザインの特徴です。大阪電通大では好きなことを追求できます。活躍できる舞台とフィットすれば本学の学生の集聚力と実行力は目を覚ますものがありますよ。◆従来の建築家の型にはまらない技術者やデザイナーを育てたいと考えています。住宅やオフィスビル、都市計画など手がける舞台は違っても、それぞれを構成するステークホルダーと横断的に対話して課題や思いを共有し、それらを調和させていける人材を目指しています。その一環として、新学部の基礎となる工学部建築学科では昨年から大阪府寝屋川市の香里三井団地でまちづくりプロジェクトが始まっています。住民同士の交流の場を創って暮らしの困り事を聞き取り、市や府住宅供給公社と連携して解決策を創り出していく試みです。リアルな現場で多角的に考え、失敗を恐れずにチャレンジしてほしいと思っています。

音でまちづくりを 大阪音大・新専攻



—2022年、大阪音楽大学提供

大阪音楽大(大阪府豊中市)が来年度「地域創生ミュージックマネジメント専攻」を開設する。音楽で人と地域をつなげる人材を養成することを目指して既存の専攻を再編する。同大学のミュージックコミュニケーション専攻は近くの野田中央公園で毎月「オープンマイクパーク」という催しを続けている。市民に好きな歌をうたってもらって学生たちが即興で伴奏する企画で、毎回小学生からシニアまで幅

い世代がマイクを握って熱唱している。スピーカーやミキサーなどの音響設備を準備して催しを進行するのは学生たち。ステージを設営し、自分で催しを運営できる技能はまちづくりの担い手としても重宝される。自分の好きな楽器や歌を通じて人と人の距離を近づけることができるのは楽しい。渡邊未帆教授は「演奏自体が得意でなくても音楽と生きていくことができる。音楽で人と場を共有する方法を実践

的に学べるような環境を整えたい」と話す。新たな専攻はミュージックコミュニケーション専攻を発展させ、住民らによる観光地づくりやミュージックツーリズムの事例、日本の伝統音楽などの知識も幅広く学んでいく。地元の豊中市や岡山市内などを実習拠点として催しの企画・運営に携わり、音響技術や音楽情報をメディアで発信する力をつける授業もカリキュラムに盛り込んでいる。7月16日午後1〜3時にはオープンキャンパスがあり、まちづくり活動に音楽を生かす方法について高校生らと意見交換を予定している。申し込みは大学のホームページから。

【安部拓輝】